



『明石の燐寸（マッチ）』刊行をめぐる（＜フィールドリポート1＞）

宮本，博

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 16:55-61

(Issue Date)

2024-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100499186>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499186>



Field ¹ Reports

『明石の燐寸（マッチ）』刊行をめぐって

宮本
博

はじめに

明石市では『新修 明石市史（仮）』刊行に向けて二〇一一年度から明石市史編さん委員会を設けて事業に取り組み、『明石』の歴史に関する調査・研究を進めている。そして、その調査の過程で明らかになった史・資料の公開や研究の成果を逐次報告するため二〇一八年から市史研究紀要『明石の歴史』を発行し、さらに、隔号でその別冊として一つの調査テーマに絞った報告書を編集・刊行してきた。これまで、二〇一八年度に二号別冊『明石の瓦』、二〇二〇年度に四号別冊『明石の酒』、そして二〇二三年度に六号別冊『明石の燐寸（マッチ）』を刊行した。

このような一つの調査テーマに絞った報告書は、市史編さん



写真1 地域調査報告書と『明石の歴史』、『同別冊』

ん委員会による編集以前からあり、明石民俗文化財調査団の編集により『明石の農村』（二〇一五年）、『明石の漁村』（二〇一六年）、『明石の宿場』（二〇一七年）、『明石の城下町』（二〇一八年）が刊行されていた。これらは、明石市の中で歴史的に特徴のある地域を中心にテーマを設定し調査を行ったもので、このような地域調査の流れを継続するため、市史編さん事業の中に位置付け、市史研究紀要『明石の歴史』別冊を刊行することになった。別冊のテーマ設定や調査・執筆は主に市史編さん委員会の地域部会が行い、必要に応じて近世部会や近代部会など他の部会の協力を得ている。テーマについては、市内全域で広く行われていた特色ある産業を取り上げてきた。

明石のマッチ産業

明石におけるマッチ産業は、明治期わが国第一の貿易港であり、後に国内最大のマッチ製造地となる神戸でマッチ製造業に参入した辰馬本家酒造の影響を受け、一八八九年（明治二十二）、主に酒造家の事業多角化の一環として始まった。その後、事業者も増えて順調に発展するが、昭和戦前期の統制経済により縮小する。一九四五年（昭和二〇）にはアメリカ軍の空襲により、マッチ関係の工場も壊滅的な被害を受け

るが、戦後、マッチの統制撤廃による多くの新規参入者を得てやがて全盛期を迎える。しかし、使い捨てライターの普及やタバコ離れ、ガスコンロへの自動着火装置の採用・普及などにより、需要の減少が急激に進み一九七五年頃（昭和五〇年代）に、明石市内でマッチの製造を行う工場は姿を消した。直接マッチ製造に携わった人や、その製造風景や工場の外観を目にした人など、マッチ製造が市内で盛んであったことを多くの人が記憶している。しかし、小規模な工場や家庭での内職仕事などが多かったため、当時の具体的な様子を伝えるような記録や資料などが少なく、またマッチづくりの灯が消えて五〇年が過ぎようとし、資料の廃棄、さらにマッチ自体が日常生活から遠ざかった今、明石でマッチというものが盛んに作られていたことが忘れ去られようとしている。このような状況の中で、今残っている資料や記憶を少しでもまとめて、後に伝える必要があることから調査テーマを設定した。

基礎資料調査

二〇二一年三月に『明石の酒』を刊行した直後から「マッチ」というテーマを設定し、基礎となる資料調査を始めた。兵庫県立図書館所蔵資料による明治・大正期の「工場通覧」、「統計書」、「商工人名録」などから明石に所在したマッチ関連会

写真2 『明石町商工人名』（明治31年9月現
営業者）より

社・工場の
情報を集め
るとともに、
マッチの歴
史や原料、
製造工程な
ど、マッチ
調査の基礎
となる資料
の収集にも

『国産マッチ 130年の歩み』（二〇〇五年）を発行して
いる一般社団法人日本燐寸工業会（神戸市中央区）所蔵資料
の現地調査を実施し（調査は計五回行った）、業界の歴史や
工場の名簿類をはじめ、マッチラベルの商標登録資料であ
る『商標公報』などを調査し貴重な情報を得ることができた。
特に、昭和戦前期・戦後期の工場所在地が判明したことは後
の調査を進めるうえで大いに役立った。

登記情報調査

会社の住所が判るとその情報の確認と詳細情報入手のため、

法務局にて登記情報の調査を行い、土地登記人や代表者など
会社の変遷を把握することに努めたが、登記をしていない会
社が多く、困難であった。登記簿はあくまでも登記上の情報
であり、借地の場合があることも考慮しながら、土地と会社
の情報を検討すると、いくつかの会社について、昭和戦前期
までの変遷を辿ることができた。

ラベル調査

マッチ箱に貼られたラベル（レッテル）は、一九五五年頃（昭
和三〇年代）から始まる広告マッチ全盛期以前はマッチ製造
会社の登録商標で、ラベルを見るとその会社が判り、マッチ
会社の顔であった。その頃のラベルは多彩なデザインから現
在でもファンやコレクターが多く、関連書籍も刊行されてい
る。これらの書籍に収載されたラベルと『商標公報』の情報
や登記情報を比較検討するとマッチ会社の変遷がみえてきた。
同じデザインのラベルを異なる会社で使用している場合、会
社の住所が同じであると、以前にあった会社を引き継ぎ、ラ
ベルのデザインも引き継がれたことが判り、また、社名・住
所が異なっているにも二社の間の関係性（吸収・合併・引き継
ぎなど）が推定された。

日本燐寸工業会の調査の中で、兵庫県明石という文字はあ

るが肝心の会社名の部分が欠損した状態のラベルがあった。ラベルの全体像を把握する必要から、『マツチラベル博物館』（東方出版 二〇〇四年）などの著作があるマツチラベル・コレクターでありグラフィックデザイナーの加藤豊氏に調査趣旨を伝えてお尋ねすると、そのラベルの完全な画像データを頂いたうえに、加藤氏所蔵資料の中から明石関係のマツチラベルの資料データを提供していただくことになった。

また、神戸市埋蔵文化財センターがマツチラベルを所蔵しているという情報を得て、埋蔵文化財とマツチラベルという繋がりに「なぜ？」という気持ちを抱きつつお伺いすると、アルバムに整理された大量のラベルがあった。神戸市を中心とした地域の飲食店等の広告マツチが主であったが、昭和戦後期に明石にあったマツチ会社の貴重なラベルも多く含まれていた。職員のお父様が趣味で収集されていたもので、それを神戸市に寄贈されたとのことであった。他では確認できない資料であり、いわゆる「コレクター」収集の資料が近・現代の地域の記録として大いに役立つ。

このような経緯により、多くのラベル情報を収集することができ、その結果『明石の燐寸（マツチ）』巻末の「資料集」が充実したものになった。

聞き取り調査

調査開始当初は新型コロナウイルスの影響により、高齢の方への対面調査は憚られたが、落ち着いてきた頃合いをみて調査を始めた。マツチ製造に携わっていたと思われる人たちへの聞き取りであった。資料調査による住所を元にした個別訪問を主に実施した他、地区の集会場に集まっていたいたり、市史編さん担当の事務室まで資料持参で来ていただいたりした。マツチ製造や下請けの内職仕事を行っていた時の様子についてお聞きすると、「祖父・祖母（または父・母）の頃のことだからない、よく覚えて



写真3 小箱貼りの作業風景『漁家 経済基本調査』（明石市水産会 1937）より

いない」「書類は処分した」「写真なんか写してない」「一〇年遅いわ」という言葉がよく返ってきた。当時、直接携わっていた方たちの多くは既に亡くなり、不要となった書類などは阪神・淡路大震災の影響で家を建て直す時に処分されていた。そのような中で、子供の頃の記憶を引き出して語っていただいた方もあり、そのお陰で調査結果に奥行きを持たせることができた。

操業中工場の調査

マッチ産業に関する調査に際して基本的な事は、マッチづくりを理解することであった。明治・大正期の様子は資料調査の中である程度把握できていたが、^②現在ほどのようにしてマッチが作られているのかを実際に確かめるため、操業中の工場への調査を計画した。日本燐寸工業会に相談した結果、工場調査が可能なのは姫路市東山に所在する株式会社日東社しかないとのことであり、早速、日東社にお願いして工場調査を行った。

マッチ棒の原料である木材の加工から薬品の塗布・乾燥、小箱の製作、箱詰め、包装など一連の流れを詳細な解説のもとに確認することができた。また、工場近くの東山自治会館^③内に日東社によって設けられている「マッチの里ミュージアム」



写真4 東山自治会館（1階に「マッチの里ミュージアム」がある）

ム」の調査も併せて行った。なお、調査は写真撮影や工場配置図と工程図の作成などのため、二度実施した。

マッチ産業と労働者

マッチ産業の歴史を語る中で忘れてはならないのは、その

主役であった働き手、労働者たちである。⁴聞き取り調査の中では、当時の職場・労働環境や待遇についての話を聞くことはなかったが、大正期の新聞には明石のマッチ工場における労働争議が報じられている。この問題については、明石の事例だけを紹介するのではなく、広く、大正期における労働問題として捉える必要があった。そのため、近代史の研究者であり前年度まで明石市市史編さん担当の事務局員であった茶谷翔氏に調査・執筆を依頼した。そして「燐寸産業と労働者——概説と大正期の明石における動向——」という原稿をいただき、研究ノートとして掲載することができた。

編集作業

掲載写真の撮影・選択や図版の作成はもちろんであるが、特に明治・大正期、昭和戦前期、昭和戦後期の三期に分けた「マッチ会社・工場の操業時期一覧」とそれら三期において市域を東西二地域に分けた位置図の作成・編集には大きな労力が注がれた。

これらの表と図はこの度の調査成果を集約したもので、今後は、この一覧表と位置図を基礎にして、マッチ関係資料の収集・整理を進めることができる。

報告書の書名は、明治期からの歴史を漂わせるため漢字の

燐寸を使った。しかし、今ではこの漢字を読めない人が多いため、ヨミが必要であったが、漢字にルビを付すのではなく、（ ）でくくったマッチの文字を漢字に続けて特に強調し、表紙においては漢字の下、表紙の中央により近い位置に置いた。

表紙の色は、マッチの頭（頭薬）を擦って発火させるために箱に塗られた薬品（側薬）の色である焦げ茶色を採用し、書名の文字色は、マッチが発火した時の炎の色を表す赤色として、目に付きやすさを考慮した。表紙の画像デザインは、明治期から昭和戦後期まで明石で作られた個性豊かな商標ラベルの中から特徴的なものを選び、それらを組み合わせるため

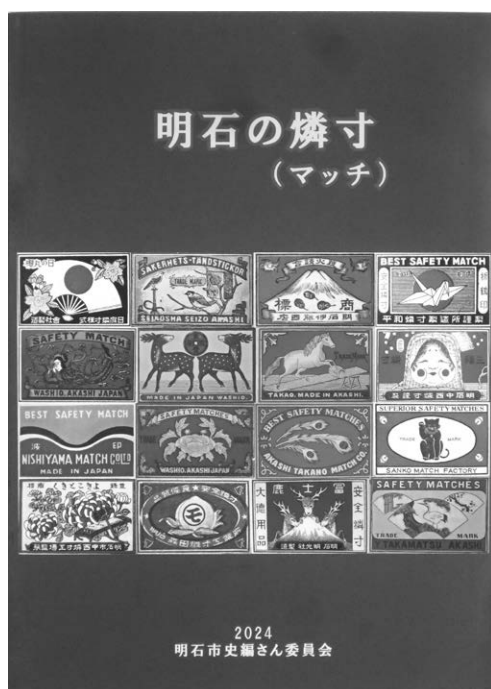


写真5 『明石の燐寸（マッチ）』表紙

置した。

このような表紙デザインをはじめ、本文の編集・構成、写真撮影や図版作成など当書の製作全般にわたって、現代史の研究者であり、当時明石市史編さん担当の事務局員であった本井優太郎氏の尽力によるところが大きい。

おわりに

明石におけるマッチ産業の調査は、この『明石の燐寸（マッチ）』が刊行されて完結したわけではない。調査に際して多くの方々からお話しをお伺いすることができたが、やはり、まだほんの一部分であることを痛感している。本書の刊行が、かつて明石で盛んであったマッチづくりについての資料や記憶を引き出して行くための契機になることを願っている。

註

- (1) 他に、『マッチレットル万華鏡』（白石書店 二〇〇一年）、『マッチラベルパラダイム』（木耳社 二〇一一年）がある
- (2) 『少年工芸文庫 第十六編 マッチの巻』（博文館 一九〇三年）、『本邦燐寸及砂糖論』（隆文館 一九一〇年）などの記述による
- (3) 用地と会館建物は二〇二〇年に日東社から東山地区へ寄贈された
- (4) 『日本の下層社会』（横山源之助 一八九九年）や『職工事情』第二卷「燐寸職工事情」（農商務省商工局 一九〇三年）に明治期

のマッチ工場の労働環境が記されている

- (5) 現在、神戸大学文書史料室特命助教
- (6) 現在、武庫川女子大学文学部歴史文化学科専任講師